

## 【B年】降誕前第7主日(2022年11月6日)

## 【旧約聖書日課】創世記 18章1～15節

1主はマムレの樫の木の所でアブラハムに現れた。暑い真昼に、アブラハムは天幕の入り口に座っていた。2目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して、3言った。

「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。4水を少々持って来させますから、足を洗って、木陰でどうぞひと休みなさってください。5何か召し上がるものを調べますので、疲れをいやしてから、お出かけください。せっかく、僕の所の近くをお通りになったのですから。」

その人たちは言った。

「では、お言葉とおりにしましょう。」

6アブラハムは急いで天幕に戻り、サラのところに来て言った。

「早く、上等の小麦粉を三セアほどこねて、パン菓子を作らなさい。」

7アブラハムは牛の群れのところへ走って行き、柔らくておいしそうな子牛を選び、召し使いに渡し、急いで料理させた。8アブラハムは、凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして、彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした。

9彼らはアブラハムに尋ねた。

「あなたの妻のサラはどこにいますか。」「はい、天幕の中におります」とアブラハムが答えると、10彼らの一人が言った。

「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう。」サラは、すぐ後ろの天幕の入り口で聞いていた。11アブラハムもサラも多くの目を重ねて老人になっており、しかもサラは月のものがとうになくなっていった。12サラはひそかに笑った。自分は年をとって、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思ったのである。

13主はアブラハムに言われた。

「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。14主に不可能なことがあるのか。来年の今ごろ、わたしはここに帰ってくる。そのころ、サラには必ず男の子が生まれている。」

15サラは恐ろしくなり、打ち消して言った。「わたしは笑いませんでした。」主は言われた。「いや、あなたは確かに笑った。」

## 【使徒書日課】

## ローマの信徒への手紙 9章1～9節

1わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り、偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって証していることですが、2わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。3わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリスト

から離され、神から見捨てられた者となってもよいときえ思っています。4彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。5先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。

6ところで、神の言葉は決して効力を失ったわけではありません。イスラエルから出た者が皆、イスラエル人ということにはならず、7また、アブラハムの子孫だからといって、皆がその子供ということにはならない。かえって、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる。」8すなわち、肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです。9約束の言葉は、「来年の今ごろに、わたしは来る。そして、サラには男の子が生まれる」というものでした。

## 【福音書日課】ルカによる福音書 3章1～14節

1皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、2アンナスとカイアファが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリヤの子ヨハネに降った。3そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一行き行って、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣傳した。4これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。

「荒れ野で叫ぶ者の声がする。

『主の道を整え、

その道筋をまっすぐにせよ。

5谷はすべて埋められ、

山と丘はみな低くされる。

曲がった道はまっすぐに、

でこぼこの道は平らになり、

6人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」

7そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝸の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。8悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起すな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる。9斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」10そこで群衆は、「では、わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。11ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。12徴税人も洗礼を受けるために来て、「先生、わたしたちはどうすればよいのですか」と言った。13ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。14兵士も、「このわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 創世記 18章1～15節

<sup>1</sup>主はマムレの樫の木のそばでアブラハムに現れた。昼の暑い頃のことで、彼は天幕の入り口に座っていた。<sup>2</sup>ふと目を上げると、三人の人が近くに立っていた。それを見ると、アブラハムは彼らを迎えようと天幕の入り口から走り出て、地にひれ伏して、<sup>3</sup>言った。「ご主人様、もしよろしければ、どうか僕のところを通り過ぎて行かないでください。<sup>4</sup>水を少しばかり持って来させますから、足を洗って、木陰でお休みください。<sup>5</sup>またパンを幾らか持って来ますので、元気をつけ、それからお出かけください。せっかく僕の近くを通られたのですから。」すると、彼らは「分かりました。それではあなたの言うとおりにしてください」と答えた。<sup>6</sup>アブラハムは天幕のサラのところへ急いで戻り、「急いで、上質の小麦粉を三セアこねて、パン菓子を作りなさい」と言った。<sup>7</sup>またアブラハムは牛の群れのところへ走って行き、柔らかくておいしそうな子牛を選んで僕に渡した。僕は手早くそれを調理した。<sup>8</sup>アブラハムは凝乳と乳、そして調理された子牛を運んで来て、彼らの前に出した。木陰で彼らが食事をしている間、彼はそばで給仕をした。

<sup>9</sup>彼らはアブラハムに「あなたの妻のサラはどこですか」と尋ねた。アブラハムが「その天幕の中にいます」と答えると、<sup>10</sup>彼らの一人が言った。「私は必ず来年の今頃、あなたのところに戻って来ます。その時、あなたの妻のサラには男の子が生まれているでしょう。」サラは、その人の後ろにある天幕の入り口で聞いていた。<sup>11</sup>アブラハムとサラは多くの日を重ねて年を取り、サラには月経がなくなっていた。<sup>12</sup>サラは心の中で笑って言った。「老いてしまった私に喜びなどあるだろうか。主人も年を取っているのに。」<sup>13</sup>主はアブラハムに言われた。「どうしてサラは、自分は年を取っているのに本当に子どもを産むことなどできるのか、と言って笑ったのか。」<sup>14</sup>主にとって不可能なことがあるか。私があなたのところに戻って来る来年の今頃には、サラに男の子が生まれている。」<sup>15</sup>サラは怖くなり、打ち消して言った。「いえ、私は笑っていません。」主は言われた。「いや、あなたは確かに笑った。」

## ローマの信徒への手紙 9章1～9節

<sup>1</sup>私はキリストにあって真実を語り、偽りは言いません。私の良心も聖霊によって証ししているとおおり、<sup>2</sup>私には深い悲しみが、心には絶え間ない痛みがあります。<sup>3</sup>私自身、きょうだいたち、つまり肉による同胞のためなら、キリストから離され、呪われた者となってもよいとさえ思っています。<sup>4</sup>彼らはイスラエル人です。子〔直訳→養子〕としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。<sup>5</sup>先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。

キリストは万物の上におられる方。神は永遠にほめたたえられる方〔別訳→キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神／万物の上にあります神は、永遠にほめたたえられますように〕、アーメン。

<sup>6</sup>しかし、神の言葉が無効になったわけではありません。実際、イスラエルから出た者がすべてイスラエル人ではなく、<sup>7</sup>アブラハムの子孫がすべてその子どもというわけでもありません。かえって、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれる。」<sup>8</sup>すなわち、肉による子どもが神の子どもではなく、約束による子どもが子孫に数えられるのです。<sup>9</sup>約束の言葉は、「来年の今頃、私は来る。そして、サラには男の子が生まれる」というものでした。

## ルカによる福音書 3章1～14節

<sup>1</sup>皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、<sup>2</sup>アンナスとカイアファが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリヤの子ヨハネに臨んだ。<sup>3</sup>ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行き、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。<sup>4</sup>これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりで

「荒れ野で叫ぶ者の声がある。

『主の道を備えよ

その道筋をまっすぐにせよ。』

<sup>5</sup> 谷はすべて埋められ

山と丘はみな低くされる。

曲がった道はまっすぐに

でこぼこの道は平らになり

<sup>6</sup> 人は皆、神の救いを見る。』」

<sup>7</sup>そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「毒蛇〔クサリヘビ〕の子らよ、差し迫った神の〔一補足〕怒りを免れると、誰が教えたのか。<sup>8</sup>それなら、悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起すな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる。<sup>9</sup>斧はすでに木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒され、火に投げ込まれる。」<sup>10</sup>群衆は、「では、私たちはどうすればよいのですか」と尋ねた。<sup>11</sup>ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。<sup>12</sup>徴税人も洗礼を受けるために来て、「先生、私たちはどうすればよいのですか」と言った。<sup>13</sup>ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。<sup>14</sup>兵士も、「この私たちはどうすればよいのですか」と言った。ヨハネは、「誰からも金をゆすったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。

**黙想のためのノート****次主日教会暦と聖書日課について**

・11月30日「降誕前第7主日」の日課主題は「神の民の選び(アブラハム)」。

・石神井教会では、「降誕前第7主日」の呼称に代えて、伝統的な呼称である「聖徒の日・終末前々主日」を用いる。

・旧約聖書日課は、「創世記」から、アブラハムのもとに三人の旅人が訪れ妻サラによって男の子が生まれることを告げられる場面。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、イスラエル＝ユダヤ人同胞の救いを願うパウロが彼らの救いに対する神の計画についての考察を述べ始める箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、洗礼者ヨハネの宣教活動を紹介する箇所。

**旧約日課(創世記18章より)**

・「創世記」全般については、前週の資料「聖書と祈り 221026」を参照。日課箇所は、「族長物語」の第一部、「アブラハム物語」中の一つの逸話。「アブラハム物語」は、アブラハム(当初は「アブラム」の名で描かれ、途中からは神に与えられた「アブラハム」の名で描かれる)が「ウル」出身の父テラと共に定住していた「ハラン」の地を離れて「カナン」地方に移住し、同地方に寄留者として留まると共に、相続者を定め死んでいくまでの一連の出来事を物語るものである。アブラハムは、「聖書」が示すとおり、イスラエル・ユダの人々の「父祖」として認識されているが、アラブ系の人々の間でも広く「父祖」として認識されていることが知られている。これは、後代にアラブ系の人々の間でユダヤ・キリスト教を母体としたイスラム教が広まった結果、広まった認識である可能性もあるが、アブラハムの元の名である「アブラム」などが古代アラブ語由来の名と考えられることなどから、元来、イスラエル・ユダの人々とアラブ系の人々とで共有された父祖伝承であった蓋然性は高い。ただし、イスラエル・ユダの人々が王国とした領域のうち、アブラハム伝承にまつわる聖地はもっぱら南部地方(南王国ユダの地方)から南に偏っており、北部地方(北王国イスラエルの地方)には少ない。一方、アブラハムの孫とされるヤコブの伝承にまつわる聖地はもっぱら北部地方に偏っている。このことから、アブラハムを父祖とする伝承は、おもに南部地方の人々がアラブ系の人々と共に共有していた一方、ヤコブを父祖とする伝承は、おもに北部地方の人々が継承していたと推認される。一方で、アブラハム伝承にもヤコブ伝承にも北方アラム地方の都市「ハラン」と結びく物語が置かれており、より古い父祖伝承としてメソポタミア地方(アブラハムの父の出身地とされる「ウル」は、大河最下流に位置するシュメール人都市国家の一つ)にルーツを持つ文化を共有していたと考えられる。古代オリエント世界のうち、いわゆる「メソポタミア文明」は、前3600年頃までに建設されたシュメール人の都市国家を端緒とするものである。

・日課箇所の「三人の旅人の来訪の逸話」は、後段から19章まで続く「ソドム滅亡の逸話」と一体をなす伝承物語である。日課箇所では、アブラハムの正妻サラとの間に跡継ぎの生まれることが告げられるが、同じことは17章ですでに神から告げられていた。重複を避けなかったのは、後段の「ソドム滅亡の逸話」の中で、アブラハム物語の当初、彼の後継と目されていた甥のロトの行く末が定まるためかもしれない。アブラハム物語全体で軸となる主題の一つは、彼の正統な後継者を定めることにある。ハランから移住を始めた当初、彼には実子がおらず、甥のロトを伴っていたのは後継者とするためであった。ロトと袂を分かった後(13章)、アブラハムは、「家の僕エリエゼル」を後継としていたが、神から実子が相続者となることを告げられ、妻の女奴隷ハガルとの間にイシュマエルをもうけている(15章)。その上で、正妻サラとの間に生まれる子「イサク」が最終的に彼の跡継ぎとして誕生することになるが、イサクを相続者とするにあたって、これまでの相続候補者の後始末をする必要があったのである。

・この逸話中、三人の旅人は、その素性を明らかにしないが、後段の「ソドムの滅亡の逸話」では、彼らが「主」(18:17)と「二人の御使い」(19:1)であったとされている。アブラハムのような天幕生活者として知られるのは、アラビア砂漠で遊牧生活から隊商生活へと至ったアラブ系の人々であるが、彼らは、旅人を迎えて歓待する習慣があったとされる。

・12節以下でサラの「笑い」が繰り返り取り上げられるのは、17章でも描かれるように、生まれてくる子「イサク」の名が「彼は笑う」という意味で付けられたものであることに関連する命名譚である(17:19)。ただし、17章で笑うのは、アブラハムである(17:17)。

・この逸話に登場する三人の旅人は、東方正教会では「三位一体の神」の象徴であり、予表としての啓示であるとして、「至聖三者」の名で呼ばれる。

**使徒書日課(ローマ9章より)**

・「ローマの信徒への手紙」の緒論については、前週の資料「聖書と祈り 221026」を参照。この手紙で、パウロは、彼の宣教する福音である異邦人とユダヤ人に共通するキリストによる神の救済計画が、正典「律法」を論拠にしたものであることを明らかにしようと試みているが、「律法」をめぐる一種のジレンマに陥っている。つまり、聖書正典としての「律法」(と「預言者」)は、歴史的にユダヤ人によって受け継がれてきたものであり、「律法」によって神はユダヤ人の先祖にご自身を示されたというところに、彼らの神信仰・神認識の根拠がある一方、ユダヤ人以外の異邦人も含む全人類の救済計画を神が実行されたとすると、「律法」の授与とそれに伴う契約によって枠づけられるイスラエル＝ユダヤ人という概念が無効化されてしまうことになり、「律法」を土台とした神信仰の根拠が揺らぎかねないことになってしまう。このようなジレンマに陥った一つの理由は、彼が、「律法(ノモス)」という語によって、「旧約」

で扱われる「律法=教え(トーラー)」と「法(ミシュパト)」の両方を取り扱ったことにあると考えられる。パウロの理解は、「神の言葉・教え」としての「広義の律法」は全人類に適用されるものであるが、「割礼」を始めとする諸々の諸規定によって生活様式が定められる「ユダヤ人」という枠組みを示す「狭義の律法」=「法や戒めなど」はユダヤ人がユダヤ人であるためのものであり異邦人には適用されない、というものである。そのことを「聖書解釈」に基づいて示すために、パウロは、「ユダヤ人」としての枠組みを与える「狭義の律法」が与えられたのはモーセの時代のことであって、「広義の律法」の土台たる「アブラハムへの約束」(また「ノアへの約束」)は、モーセの時代以前にすでに与えられていた、という論理を展開している(ローマ 4 章)。日課箇所の後半(6 節以下)は、そのことを示すものである。

・日課箇所の前半でパウロは、キリストによって神の救済計画が全人類に適用されるようになったという彼の宣べ伝える福音を受け入れない同胞ユダヤ人の多いことを嘆き、彼らのために自分は犠牲になってもよいという思いを示している。この思いは、8 章までで「ユダヤ人」の誇りを毀損するような論を展開してきたゆえの、一種の懺悔である。しかし、彼はこの後、ユダヤ人の特別な歴史的立場を認めながら、ユダヤ人と異邦人の双方に神が計画された救済計画の統一的な原理を提示していくことになる(11 章)。

### 福音書日課(ルカ 3 章より)

・日課箇所は、「洗礼者ヨハネ」を紹介する記事で、基本的な枠組みは共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)に共通するものである。「洗礼者ヨハネ」は、初代教会で主イエスの宣教活動に先立つ先駆者として位置づけられてきた歴史的な人物で、当時のユダヤ人歴史家ヨセフもその人物像を伝える、大衆的に人気を誇った宗教家である。彼の捕縛後に、主イエスは独自の宣教活動を開始したとされる。

・洗礼者ヨハネの紹介記事を、「ルカ福音書」は、主イエスの誕生物語(2 章)と同様に、当時の支配者名を記すことで時代設定することから始めている。「ルカ」は、「福音書」および「使徒言行録」で物語る出来事を、明確な時代背景の中で描こうとしている。「皇帝ティベリウス」(帝位=後 14 年~37 年)は、初代皇帝アウグストゥスの養子となって帝位を継承したが、即位したのは 54 歳になってからで、67 歳以降は事実上隠遁生活を送っていたとされる。「ユダヤの総督ポンティオ・ピラト」(在職=後 26~36 年)は、皇帝ティベリウスの晩年にユダヤ総督となっていた人物。

・「洗礼者ヨハネ」の宣教活動を具体的な使信と共に伝えているのは、「マタイ」と「ルカ」で、両者の伝えるヨハネの使信は似通っている。しかし、「ルカ」は、そこに、人々の「わたしたちはどうすればよいのですか」という問いに対するヨハネの答えを挿入している(10~14 節)。尋ねる人々のうち、徴税人と兵士は、ユダヤ

総督のもと支配体制の中に身を置く者たちであるが、共通するのは、ヨハネがいずれの者に対しても、経済活動に関わる行動指針を示していることである。「ルカ」は、背景となる政治や社会の状況を想起させながら、読者を、政治的関心にはなく、各自の経済判断への関心に向かわせようとするのである。

### 来週の誕生日 (11 月 6 日~12 日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-227 番「主の真理は」(= I-85 番「主のまこと」)は、明治初期の日本人作(国学を学び半キリスト教の意図で教会に潜入した結果信仰を持ち、キリスト教学校で教えながら讃美歌集編纂に携わった松山高吉と推定)の歌詞が原詞。1903 年版『讃美歌』以来、ユダヤ教聖歌の曲と組み合わせられた。
- ・21-120 番「主はわががいぬし」(= II 41)は、詩編 23 編のスコットランド詩編歌で、ウィリアム・ウィッテンガムの原歌詞をピューリタンの讃美歌作家フランシス・ローズが補筆。曲は、19 世紀の詩編歌集で公にされ、1947 年の英女王結婚式で歌われ広まった。
- ・21-77 番「パンくずさえ拾うにも」(= I 206「主のきよきつくえより」)は、19 世紀英国の国教会司祭 E. ビカーステスの作詞(同名の息子は宣教師として日本聖公会設立に貢献)。曲は、英国教会のオルガニストであったラングランの作曲で、元来は 21-218「日暮れてやみはせまり」のために作られたもの。

#### 21-120「主はわががいぬし」

#### *The Lord's my shepherd, I'll not want*

1. The Lord's my Shepherd, I'll not want; / He makes me down to lie / In pastures green; He leadeth me / The quiet waters by.
2. My soul He doth restore again, / And me to walk doth make / Within the paths of righteousness, / E'en for His own name's sake.
3. Yea, though I walk in death's dark vale, / Yet will I fear no ill; / For Thou art with me, and Thy rod / And staff me comfort still.
4. My table Thou hast furnished / In presence of my foes; / My head Thou dost with oil anoint, / And my cup overflows.
5. Goodness and mercy all my life / Shall surely follow me, / And in God's house forevermore / My dwelling-place shall be.

#### 21-77「パンくずさえ拾うにも」

#### *Not Worthy, Lord, to Gather Up the Crumbs*

1. Not worthy, Lord, to gather up the crumbs / With trembling hand, that from thy table fall, / A weary, heavy-laden sinner comes / To plead thy promise and obey thy call.
2. I am not worthy to be thought thy child, / Nor sit the last and lowest at thy board; / Too long a wanderer and too oft beguiled, / I only ask one reconciling word.
3. I hear thy voice; thou bidd'st me come and rest; / I come, I kneel, I clasp thy pierced feet; / Thou bidd'st me take my place, a welcome guest / Among thy saints, and of thy banquet eat.
4. My praise can only breathe itself in prayer, / My prayer can only lose itself in thee; / Dwell thou for ever in my heart, and there, / Lord, let me sup with thee; sup thou with me.